

令和5年度全国学力・学習状況調査 結果の概要

女川町立女川小学校

1 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準を維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 改善の取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

2 調査実施月日 令和5年4月18日(火)

3 対象学年 女川小学校第6学年児童34名
当日実施児童34名

4 調査事項及び内容

- (1) 教科に関する調査：国語、算数
- (2) 生活習慣や学習環境に関する質問紙調査

5 本校と県・全国との比較

	国語	算数
宮城県	下回っている(▼)	大きく下回っている(▼)
全 国	かなり下回っている(▼)	大きく下回っている(▼)

6 学力調査結果から

(1) 国語の成果・課題と指導改善のポイント

①調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・「知識及び技能」における「(2)情報の扱いに関する事項」が宮城県、全国平均と比較して若干上回っている。

(課題)

- ・無解答率が宮城県、全国平均と比較して高い。ほぼ全ての設問で宮城県、全国平均を下回っている。中でも漢字について答える問題は、最も無解答率が高かった。自分の解答に自信を持つことができず、そのことが正答率を全体的に押し下げることにつながっていると考えられる。
- ・「記述式」の問題のほぼ全てで、正答率が宮城県、全国平均を下回っている。特に自分の考えをまとめる問題では、宮城県、全国平均と比較して大きく下回っている。
- ・「A話すこと・聞くこと」についても、宮城県、全国平均と比較して大きく下回っている。

②指導改善のポイント

- ・「知識及び技能」における漢字指導については、これまでどおり、反復して取り組み定着させることを継続する。また、教科書の本文に出た言葉を辞書で調べる活動などを取り入れ、児童の語彙を増やしていく必要がある。

- ・「読むこと」「話すこと・聞くこと」の問題については、文章や相手の発言から中心となる言葉を読み取る力を身に付けさせる必要がある。中心となる言葉を見付けて丸で囲ったり、関連する言葉を線でつなげたりすることを、普段の学習から意識的に取り組ませる。また、インタビュー記事や会話を記録した文章に触れさせ、読書活動を通して話すこと・聞くことに係る経験を積み重ねていきたい。
- ・「記述式」の問題については、自分の考えを文章にまとめて相手に伝えたり、提示された条件に合わせて文章を書いたりする力を身に付けさせる必要がある。そのために、提示された条件に従って短作文を書く活動や、書いた文章を互いに推敲し合う活動に取り組ませる。自分の考えを文章にまとめる力や相手に伝える力が向上することで、解答に自信が持てるようになり、無解答率の改善につながると考える。

③質問紙から

- ・「国語の授業内容がよく分かるか」という質問に否定的な回答をした児童が2割以上おり、宮城県、全国平均と比較して下回っている。国語の学習に関する他の設問でも、肯定的に回答した児童が7～9割いるものの、宮城県、全国平均と比較すると下回っていることが多い。特に、自分の考えをまとめることや文章を推敲し合うことについては、肯定的な回答が大きく下回っている。国語の学習への苦手意識が自信のなさにつながり、無解答率の高さに表れたと考える。
- ・「国語の学習が好きか」という質問には、4割近くの児童が「どちらかといえば当てはまらない」「当てはまらない」と否定的な解答をしている。一方で、国語の学習が「大切である」「将来役に立つ」と解答した児童は8割以上に達している。苦手意識を持つ児童に対して、国語の学習への必要感もたせたり、学習意欲を高めたり、児童が自信を持って学力を発揮できるようにしていきたい。

(2) 算数の成果・課題と指導改善のポイント

①調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・「D データの活用」については、宮城県、全国平均と比較して、他の区分より大きな開きがない。グラフを読み取る問題では、宮城県平均と比較するとやや上回っている。

(課題)

- ・「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」とともに県平均、全国平均を下回っている。特に「思考力、判断力、表現力等」については、全国平均と比べると大きな開きが見られる。
- ・「記述式」の問題の正答率が低く、宮城県、全国平均と比較して大きく下回っている。問題によっては正答者がいない箇所もあった。前述の国語の結果とあわせて、児童の書く力や説明する力の向上が必要であると考えられる。
- ・領域別では、「変化と関係」など小学校4年生時の学習内容と関連する問題では、正答率が宮城県、全国平均と比較して大きく下回った。

②指導改善のポイント

- ・数量の変わり方や三角形の性質など、小学校4年生時に学習した内容が定着できていない。該当学年に立ち返って復習させたり算数コーナーを充実させたりするなどして、単元の学習に入る前に、前提となる知識を定着させることが必要である。

- ・「記述式」の問題について、国語と同様に、自分の考えを文章にまとめて相手に伝えたり、提示された条件に合わせて文章を書いたりする力を身に付けさせる必要がある。様々な形式の問題に取り組ませることで、指定された形式での解答ができるように書く力を高めていきたい。
- ・自分の考えを説明する力を向上させるために、友達に自分の考えについて話す活動を取り入れていきたい。解答が明白な問題について互いに説明し合うなどの活動が効果的であると考え。また、下学年に教える機会を積極的に設け、既習事項を確認すると共に、分かりやすく説明する経験も積み重ねていきたい。
- ・「D データの活用」の領域については、他の区分と比較して宮城県、全国平均との差が小さい。データの活用は社会科などの他教科でも求められるものである。そのことを児童にも理解させ、学習への興味・関心を高めていきたい。

③質問紙から

- ・算数に対して、「好きだ」と感じている児童が全体の3割に満たなかった。算数の授業がよく分かると感じている児童も全体の半数以下である。また、算数が「大切だ」「社会に出たときに役に立つ」と感じている児童は、宮城県、全国平均と比較して大きく下回っている。このことから、算数の学習の必要性を児童はあまり感じていないため、苦手意識を持ったり、学習内容が分からず、解答を諦めてしまったりすることにつながっていると考えられる。児童に算数の学習への必要感を持たせ、学習への意欲を高めていくことが大切である。
- ・「算数の授業の内容がよく分かるか」という質問には、半数以上の児童が「分からない」と回答している。宮城県、全国平均で同様の回答をした児童と比較して、大きく上回っている。児童が自身の学力に不安を感じ、苦手意識を持っていることが、相手に伝えようとする意欲を下げることにつながっていると考えられる。書く活動や説明する活動を通して児童に自信を持たせながら、「分かった」「できた」と感じる授業づくりを行っていくことが大切である。

7 児童質問紙調査結果から（○成果、▲課題）

（1）生活習慣・学習習慣について

- 学級のほとんどの児童が毎朝朝食を食べてきている。
- 8割以上の児童が毎日同じくらいの時刻に就寝・起床している。
- ▲家で毎日計画的に学習に取り組んでいる児童が2割に満たず、学校の授業以外の学習時間が全国・県平均を大きく下回っている。
- ▲家庭にある本の冊数は、県・全国平均を大きく上回っているが、本や新聞を読んでいる時間はかなり下回っている。

（2）規範意識・自己有用感について

- 9割近くの児童が「いじめは、どんな理由があってもいけないことである」と理解することができている。
- 「人が困っているときに進んで助けている」と自信をもって回答している児童が5割で、県・全国平均を上回っている。
- ▲自分には、良いところがあると思っている児童が、学級の6割程度である。全国・県平均と比較すると大きく下回っている。
- ▲5年生までに受けた授業で学んだことを、自分の考えに生かせていないと感じている児童が多

い。課題解決に対して自分なりに取り組もうとしてはいるが、うまくつなげられていないことが分かる。

8 今後の取組

(1) 「基礎的・基本的な知識・技能」の確実な定着を図る授業等の改善

①児童が「何が分かったか」「何ができるようになったか」を実感できる学習指導の充実

- ・宮城県教育委員会から示されている「学力向上に向けた5つの提言」を引き続き、全学級で確実に取り入れることにより、児童の自己有用感を高めたり、基礎学力の定着を図ったりする。特に、授業のねらいを明確にするとともに、授業の終末に適用問題や小テスト、授業の感想等を書く時間を確実に実施していく。
- ・校内研究において教師の指導力の向上を図るとともに、児童の目指す姿の共通理解を図り、教職員が一丸となって学力の向上に取り組む。

②個に応じた学習指導の充実

- ・タブレット端末やA I型学習教材（キュビナ）を活用し、繰り返し学習に取り組ませたり、下の学年に遡って学習に取り組ませたりするなど、個に応じた学習を充実させる。
- ・コース別学習、T・T指導、取り出し指導などを、学習内容の定着の実態に応じて実施する。

(2) 学びの土台となる望ましい生活習慣・学習習慣の形成

①基本的な生活習慣の確立

- ・生活習慣の改善を図るために「うみねこルール」（基本的な生活習慣を身に付けさせるため、児童会で定めた約束事）を全校児童で常時意識させるとともに、情報モラル教室など外部講師による親子学習会を行うなど家庭に対しても働きかけていく。
- ・「スマイルタイム」（健康や生活習慣を確立するために、養護教諭が中心となって指導にあたる時間）を毎月設け、児童の基本的な生活習慣を確立させるとともに、その様子を保健だよりや学校ホームページで発信し、家庭に対しても啓発していく。

②自己有用感の涵養

- ・「キャリアパスポート」を活用し、自分の得意なことや夢について自己認知する機会を設けるとともに、各学校行事などにおいて児童の成長を認め、励ますことを通して、児童の自己有用感を高めていく。
- ・女川生活実学（総合的な学習の時間との関連）の中で、職場体験学習や校外学習などの、勤労観や社会性を養う体験活動を充実させる。
- ・高学年では、学校の中心として委員会活動や縦割り活動、各学校行事などにおいて活躍する場を設定し、保護者、教職員、地域の方々から認められ、褒められるような機会を設ける。

③家庭学習習慣の定着

- ・家庭学習の内容は、授業と関連付け、予習的な課題や復習的な課題、活用的な課題など児童の実態や、単元の進捗状況などを踏まえたものとする。
- ・家庭学習においても個に応じたものとするために、タブレット端末やA I型学習教材（キュビナ）を活用しながら、自分の興味のある内容や苦手としている内容など、児童が自分で選択して取り組むことのできる課題を設定する。

(3) 女川中学校、女川向学館、地域との連携強化

①中学校との連携

- ・校内研究の主題を共通のものとするこゝで、9年間を見通した指導を行う。
- ・小中教科部会を行い、学習状況やその他の情報交換を行うこゝで各教科の指導においゝての9年間のシラバスを活用し、系統立てて指導する。
- ・中学校での学習にスムーズに取り組めるように、小学校への乗り入れ指導を行う。

②女川向学館との連携

- ・本校では、高学年においゝて主に算数科の補充学習を月1～2回程度行っている。その際、女川向学館の職員に來校していただき、担任とともに児童への学習支援を行っている。
- ・女川町教育委員会生涯学習係が運営している「おながわ放課後楽校」においゝて、各学年の担任と情報交換を行い、補充学習を中心とした学習支援を行う。
- ・各種検定においゝて、女川向学館に実施協力を得て、検定取得機会の確保と学習意欲の向上につなげる。

③地域人材の活用

- ・女川町教育委員会生涯学習係で作成した「女川小学校版人材バンク」や「出前授業」を活用することにより、地域の教育力を生かす。
- ・女川町教育委員会生涯学習係との連携を深めて「家読の日」の啓発を行うこゝで、読書をしたり新聞を読んだりすることを習慣化させ、「読解力」を身に付けさせる手立てとする。